

第二部 パネルディスカッション

ファシリテーター 藤井克徳氏 (第一部講師)

パネリスト

- 石田勝氏 ピアサポーター 長野県ピアサポートネットワーク役員
ハートラインまつもと所属
- 広沢里枝子氏 ピアカウンセラー 上小地域障害者自立支援生活センター・ウィング
- 宮尾千恵子氏 家族 長野市手をつなぐ育成会
- 三浦典子氏 看護師・保健師 長野県立こころの医療センター駒ヶ根
- 大堀尚美氏 長野県ピアサポートネットワーク代表 NPO 法人ポプラの会副会長・事務局長
地域活動支援センター・ポプラ事務局長

●パネリストの発表

石田 勝氏／※資料 17-18 ページ参照、以下補足。

- ・“やらなきゃいけない”のはプレッシャーに感じる。
- ・やりたいという目的意識、やろうとする覚悟から願いの強さが生まれる。
- ・独りよがりになることがある。人がいると苦しく感じることもある。
- ・(今日発表の場にいるのは) 共感できる部分があればという願いがあり、この場にいる。
- ・当事者である自分たちの考えを聞いてほしい。
- ・(藤井氏への質問) 条約は病気に対応する文も書かれているか。
- ・(病院の活動について) 退院意欲に繋がるよう発信する。患者から言葉が引き出せるよう説明している。

藤井氏／石田氏の話のポイントは【願う力】。目標をもつこと、意欲と関係しながら発展していく。自分が共感したりすることで、願う力が後ろ盾になっている。

念ずれば通じる。考えていると情報が入ってくる。例えば“障がい”について考えると新聞で“障”という字を見かけるだけでその情報に関心をもつ。それが“障がい”とは関係ない文だとしても。人との変わり方も変わる。

広沢 里枝子氏／※資料 19-21 ページ参照、以下補足。

- ・「上小地域障害者自立生活支援センター・ウィング」での勤務時は視覚、女性の方が相談にくることが多い。もっと自らが動かなければ。目が見えなくなると病院の中が一番辛い思いをしている。
- ・ラジオでのお仕事は心を伝えられる機会。地域の皆さんを繋ぐ役。
- ・「東御市視覚障害者ネットワーク ゆるり」にも所属。
- ・(子育ての際、失明していたことで) 檜の檻に閉じ込められたような状態だった。玄関から一步も出られなかった。盲導犬を持ち、動いた。とにかく動いた。助けを求めた。読み書きのボランティア、ラジオからの発信、講演会等地域に背中を押してもらった。

・(女性障害者への重複差別について) 異性介助は女性であることを忘れるよう忍耐しながら介助を受けている。賃金格差は就職の困難さから生まれている。

公的機関はぜひ性別に特化した調査をしてほしい。

藤井氏／広沢氏は【伝えながら戦う人】。社会を良くしようとする戦い。重複差別の背景には複合問題がある。女性団体と障害者団体が手を組む必要性がある。民間団体は調査しているが、県や国レベルが調査できるようデータを集める。

(県条例が必要な意味について) 例としてタイタニックをあげる。タイタニックは法律・条約。進む方向を定める。客室は県。部屋がきちんとしていなければ沈没する。客室を守るのが条例。両方がしっかりしていなければ快適ではない。長野県の客室を温かい部屋に。

宮尾 千恵子氏／※資料 22-23 ページ参照、以下補足。

・息子に選択する権利を考えていきたいと思いつつ自分が決めてきた。選択する方法を考えていきたい。

- ・日常生活についてこれでいいのか見直していきたい。
- ・人手不足でサービスが足りず、できないことも多い。
- ・親が代わりに声をあげていきたい。

藤井氏／宮尾氏は【息子さんあつての宮尾さん】。

藤井氏からの言葉を受け、宮尾氏／息子が生まれるまでは生活圏に福祉がなかった。

藤井氏／息子さんが繋ぐ役目になった。普通とはなにか。普通を察しできるように。

三浦 典子氏／※資料 24-26 ページ参照、以下補足。

- ・(ピアサポートについて) 医療現場ではあまり身近なものではない。
- ・専門職としての知識・技術も大事だが、主人公は誰か。患者さんや病気をもっている人と繋がりたい。
- ・病院にピアサポという風を。風穴をあけたい。

藤井氏／三浦氏は【何でもやるぞ！保健師さん】。

自分と考えが遠いところの人と話すのは優生思想に打ち勝つもの。

強い人から手をひくことが大事。医師と患者は医師から少し手を引く。

理念から形へ。仕組みにする。そうすることで形になる。

大堀 尚美氏／※資料 27-30 ページ参照、以下補足。

- ・社会的入院等に問題に取り組んでいる。
- ・身体拘束がこの 10 年間で 2 倍に。当事者から問提起を。
- ・地域移行が困難な状況に感じている。
- ・(三浦氏の話を受け) 病院に新しい風を。家族以外も足を運べるように。

・(法人格取得によって) 補助金で活動できるようになる。苦情も自分たちで考えなければいけない。

・(活動によって) 障がいだけではなく自分をみてもらえるようになった。活動当初は社会的経験のなさをどう補うかが課題だった。今の自分があるのは障がいの有無に関わらず支えてくれた人々のおかげ。

・権利が守られているか当事者だからこそできる活動をしていく。当事者として提言していきたい。最近では公共交通料金の改正を提言した。障がいのある人も一人の人間として尊ばれる社会に。ポプラの会でも運動をしていきたい。

・経済的保障があり、働ける場所を作っていきたい。

藤井氏／大堀氏は【取り戻している青春】。人は理想を失った時に“高齢”になる。年齢によって“高齢”になるのではない。

実践はより効力がある。これを国や県の制度に。ピアカウンセラーの活動を県に反映させていってほしい。制度化を目指してほしい。

●質疑応答・意見交換等

発言者①(視覚障がいをお持ちの一人暮らしの男性)／以下発言。

・当事者会に所属している。仲間がいて楽しい。

・地道な行動が大切と感じた。スタンドプレーはだめ。実態調査が大事だと感じた。

・手帳交付まで1年かかり、困っているときにサービスが受けられなかった。とても苦勞した。サービス内容の選択肢がなかった。行政があてにならないと感じた。予算・計画に問題がある。

発言者②(地活カナン職員)／以下質問。

・ピアカウンセラーの制度化は？

発言者③(精神障がいをお持ちの男性)／以下発言。

・医療、福祉とはなんだろうか。

・沖縄ではピアサポーターが病院で説明をしている。

・当事者抜きに専門職が話している。専門職の横に当事者がいるという現実。

発言者④(精神障がいをお持ちの男性)／以下質問。

・入退院を経験。現在は病院食を作る仕事にパートとして働いている。

・繋がりを作りたい。ピアサポーターになるにはどうしたらいいか？

発言者⑤(身体障がいをお持ちの子育て中の女性)／以下発言。

・公的サービスを利用しようとするとう家族義務をまず問われる。

・重度の友人はサポートが手厚い。軽度の場合、サポートを受けづらい。

大堀氏／（ピアサポについて）相談支援を通じてピアカウンセラーに繋がった。当事者会については保健センターに。個人でピアサポを行いたいか、仕事としてしたいかによって取り組みが変わってくる。経済的支援がないと続かないこともある。法人化によって事業の受託ができる。受託によって公的な資金がもらえる。

三浦氏／（病院内のピアサポについて）病院独自でピアサポに力を入れているところは多くはない。当院では断酒会としてピアサポは行われている。

藤井氏／家族の扶養義務制度の見直しと所得保障の充実に力を入れている。自助はおかしい。公的責任。制度化については大堀氏の発言のとおり。制度化によって大事な魂が変質してしまうこともある。

●まとめ

石田氏／それぞれの生きづらさを知り、勉強になった。

広沢氏／地道な活動はじわじわとしか成果を得られないが広げていきたい。

宮尾氏／みんなで手を繋いで頑張っていきたい。

三浦氏／ひとりひとりの言葉が胸におちた。

大堀氏／別の苦しみを知れることができた。

藤井氏／困った時は集まろう。一人の行いが思いもよらない渦を作る。